

戦略で探る 近江の城

八幡山城

封印された城

滋賀県立大学教授 中井 均

天正13(1585)年、豊臣秀吉は信長の居城であった安土城を廃して、近江における新たな拠点となる八幡山城はちまんやまじょうの築城に着手します。そしてその城主に養子秀次を配します。さらに秀次付の宿老として山内一豊を長浜城に、堀尾吉晴を佐和山城に、中村一氏を水口(岡山)城に配しました。そして田中吉政が留守居役的な立場で八幡山城に詰めていました。

城は標高283mの八幡山の山頂部を本丸とし、三方に伸びる尾根筋に北の丸、西の丸、二の丸をそれぞれ配置する構造で、これらの曲輪はすべて石垣によって築かれました。本丸には現在むらくも ごとしやういりゆうじ村雲御所瑞龍寺が建立されており、城跡の痕跡を残していませんが、その門は元来の本丸こぐち虎口に建てられており、見事に枡形虎口が残されています。また瑞龍寺建立に際して発掘調査が実施されましたが、本丸からは巨大な礎石建物跡が検出されており、山頂には壮大な御殿が造営されていたことが明らかとなっています。

一方、二の丸の尾根と西の丸の尾根に挟まれた南山麓には居館が構えられていました。通称秀次居館と呼ばれるこの屋敷は谷をせき止める巨大な石垣によって構えられ、屋敷の外側には階段状に家臣たちの屋敷も配置されています。秀次居館からは発掘調査の結果、御殿の礎石が検出されたとともに大量の金箔瓦が出土しており、八幡山の山麓には金箔瓦の葺かれた絢爛豪華な御殿が造営されていたことも判明しました。

ところでこの山麓居館の発掘調査では大変興味深い事実が明らかとなりました。それは御殿を取り壊した後に粉々に砕いた瓦を一面に敷き並べ、さらにそれを粘土によって埋めていたのです。自然に埋没したのではなく、意識的に封印されたようです。豊臣秀次は文禄4(1595)年に、謀反の罪で秀吉から切腹を命じられます。当時すでに八幡山城は京極高次が城主だったの



ですが、秀吉は高次を大津城に移し、八幡山城の破却をおこなっています。関白となった秀次は京都の聚楽第を居城としていましたが、この聚楽第も秀吉によって徹底的に破却され、その痕跡は地上には一切認められないほどです。

八幡山城では石垣が残っており、破却は天守などの建物の解体だけだと思われていたのですが、発掘調査で居館は徹底的に破壊され、その痕跡まで封印されていたことが明らかとなったのです。

現在、近江八幡は滋賀県内でも有数の観光地となっていますが、その目玉のひとつが八幡堀です。この八幡堀とは八幡山の山麓に人工的に巡らされた水堀ですが、城下の武家地と町屋を区画するためのもので、堀の内側が武家地、外側が町屋となっていました。さらにこの堀は琵琶湖に直結しており、単なる城下を区画するだけではなく、物資を直接舟運によって城下に運び込む役割も担っていました。

近代になるとこうした城下の外堀にはゴミが投棄され、臭く汚いと日本全国で埋められてしまいます。八幡堀も昭和40年代に埋められる直前でした。しかし地域の人たちの努力で八幡堀として甦り、代表的な観光施設となっています。

中井 均(なかい ひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て現職。びわこ学院大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。